

キャンパスの樹木

| collection 5 |

ク ス ノ キ



大学今出川キャンパスの至誠館、ハリス理化学館前の樟樹並木

クスノキ（樟、楠）は、クスノキ科クスノキ属の常緑高木である。この木は、関東地方から西南方の本州、九州、台湾、中国南部、東南アジアの温帯、亜熱帯に自生する。丈夫で育ちやすく長命である。樹高は、普通20〜30m、直径は80〜150cmであるが、地方にはそれをこえる巨樹も多い。樹皮は灰褐色で、縦に細かく割れる。葉は広葉で互生し、卵形か楕円形、つやがあり明るい。三本の葉脈がよく目立つのが特徴。花は白黄色で4〜6月ごろ咲く。実は黒紫で、熟すと鳥が好んで食べる。この木は腐りにくく加工しやすいため古代より船材、建築材、木工材として重用された。またこの木は、全体にシヨウノウ（樟脳）を含み、芳香があり、防虫剤やセルロイドの原料としても使われた。

クスノキは、日本では社寺、公園、学園、街路に好んで植えられている。他大学にもクスノキはよく見かけるが、

並木となると珍しく、わが大学今出川キャンパスの「樟樹並木」は特に見事である。この樟樹並木は、今出川キャンパスのメインロード（「パーパスロード」）の南北に整然と植えられていて、一年中緑の美観を形成し、校庭に深い潤いを与えている。現在、南側（図書館、明徳館、弘風館、神学館前）に21本、北側（至誠館、ハリス理化学館前）に14本、東側（待辰館、クラーク記念館前）に3本が確認される。

さて、わが大学のクスノキは、その大部分が校友の故安東長義氏によって寄贈されたものだ。そのことは、この並木の一角にある記念碑に「彰樹並木 昭和 年安東長義氏寄付 昭和三十四年九月 同志社」と刻まれていることが証している。（ここで寄付年が刻まれている理由は不明である。）安東氏は大正7年大学神学部を卒業し、「薬石日報」社長の傍ら同志社財団理事を務め、多方面で学園の発展に

貢献し、昭和33年に逝去した。同志社に対しては、クスノキの寄付だけでなく、同志社図書館への本の寄贈（「安東偉人文庫」、新島旧邸保存など多大な財政支援を行っている。氏の名を知る者は今日少ないが、陰で同志社を支えた功労者の一人であり、特に大学校庭緑化の最大の恩人である。

ところで記録によると安東氏は、昭和10年同志社創立60周年記念にあわせて樟苗300本を寄付している。この木は当初大学の校庭全域に植えられていたが、昭和23年及び昭和30年にかけて学校当局により並木として整備された。そこには学園の景観を整えることと、校舎の増築によるこの木の消滅を防ぐ意図があったと思われる。

故河野仁昭氏（社史資料編集所主任など歴任）は安東氏の樟苗大量寄付の理由を、同志社創立60周年記念、昭和9年の室戸台風による庭園の荒廃救済、将来用材として売却し同志社財政

の一助とする意図があったためと推測している。さらに私は、氏が「教育は緑の中で」という信念をもっていたことも一年中緑陰をたたえるこの常緑樹を選んだ理由ではないかと思っている。いずれにしてもこの「樟樹並木」は、今出川通り沿いの「松並木」とともにわが学園の「尊い歴史的遺産」（故住谷悦治元同志社総長の言葉）であり、永く愛護してほしいと願っている。

（元大学社会学部教授 宇治郷毅^{うじこう}）

（参考文献：『彰苗三百本寄付』『同志社々報』57号 1935年9月15日、秦孝治郎「嗚呼、安東・海老沢両君を憶う』『同志社タイムス』99号 1959年1月、河野仁昭「樟並木と松並木』『キャンパスの年輪―同志社今出川校地』同志社大学出版部 1985年12月、宇治郷毅「安東長義と「安東偉人文庫』『同志社大学図書館学年報』41号 2016年）